

ひめまつ

創立者須賀栄子先生50年祭記念号

39



武幸

宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

ひめまつ 目次

(第三十九号)

表紙絵……………島田武幸

題字……………石川木魚

写真……………写真部・新聞部

巻頭言 学園の発展を期して……………校長 須賀 淳……………1

創立者栄子先生五十年祭特集……………4

献歌 五十年祭に当たりて……………栃木県文化功労者・元本校教諭 手塚 武……………5

偉大な生涯を顧みる……………6

栄子先生の思い出によせて……………同窓生 伴 コウ……………8

栄子先生をたたえる……………前南大飼中学校長 青木 照徳……………9

自覚と責任ある生徒会へ(生徒会会長に就任して)……………小田 弘子……………10

創造・協調・実行を(任務を終えて思うこと)……………大城 則子……………11



『若さ』について……………12

| | | | | | |
|-------------|----|-------|---------------|----|-------|
| 「若者よ燃えろ」 | 三年 | 甲斐 祐子 | 「若さは力と勇気の源」 | 一年 | 高柳 美和 |
| 「必要な精神的若さ」 | 三年 | 高山 典子 | 「年齢では判断できぬ若さ」 | 一年 | 金沢 典子 |
| 「若さは誰でも保てる」 | 三年 | 柴田 恵子 | 「若さに基準はない」 | 一年 | 市本 浩子 |
| 「若さに甘えるな」 | 二年 | 飯面 一昭 | 「私の青春」 | 一年 | 森田 利香 |
| 「光の中を生きる」 | 二年 | 高瀬 一郎 | 「過ぎて気づくもの」 | 一年 | 松本 尚子 |
| 「若さは永遠のもの」 | 二年 | 柳田智恵子 | 「若さを最大限に発揮」 | 一年 | 須崎 明子 |
| 「若さは大切な武器」 | 二年 | 中津 智子 | | | |

*心に強く響くもの(校内読書感想文入賞作品)……………21

| | | | | | |
|-----------|----|-------|----------------|----|-------|
| 「破戒」 | 三年 | 田中 寿一 | 「父さん、お帰りなさい」 | 二年 | 庭瀬 恵美 |
| 「車輪の下」 | 三年 | 伊藤 愛子 | 「金閣寺」 | 一年 | 大塚 道夫 |
| 「クヌルプ」 | 三年 | 野沢 善久 | 「沈黙」 | 一年 | 三宅 教子 |
| 「真実一路」 | 二年 | 豊田京井子 | 「ノストラダム大予言の秘密」 | 一年 | 高瀬 綾子 |
| 「風と共に去りぬ」 | 二年 | 金子 隆 | | | |

◆作品集

詩 (三年) 福田 享子・枝村由紀子 他

短歌 (二年) 松本裕紀子・他

俳句 (二年) 豊田 恵子・金子 智美・佐藤みどり・星 佳枝 他

☆あとらんだむ

(三年) 川井佐智子・(二年) 小山 幸子・水野 正明・大庭美恵子・(一年) 高沼 江美……………44

♡関西・四国・大洗・日光の旅

(三年) 海老沢 香・枝村由紀子(二年) 加藤真理子(一年) 高橋 征美・小山恵美子

招待席

伊沢 雪夫・荒牧 純一・廻谷 和子・大谷 武・和久 誠・角海 武・三宅三恵子……………56

◆わがホームルームの紹介

……………73

◆委員会・クラブ活動この一年(風紀・保健・美化・文化部・運動部)……………98

◆学園ニュース(PTA総会・研修会・球技大会・他)……………115

◆学友会の奉仕活動……(陽西・陽北支部他)……………123

◆告知板(各種礼状の数々等)……………129

附中コーナー

三期生を迎える……………136

作品集

(二年) 石垣 尚子・長澤 正志・(一年) 相田 淳子・青木 康敏……………138

◆五十九年度生徒会報告

●各種成績・就職状況……………143

●職員住所録……………148

●編集後記・奥付……………154

●校史と校章……………154



修学旅行に校長先生も一緒に (5月)



昨年冬は大雪で校庭も真っ白 (2月)



「24の鐘」の碑の分教場を訪れる (5月)



④ 拍手に送られ卒業生が巣立つ (3月)
⑦ 春の日浴び入学式の受付 (4月)



家政科の食物研究授業行われる (6月)

学園スナッフ

宇都宮短期大学附属高等学校

校歌

作詩 菅谷徳次郎
作曲 野原幸夫

ふに たらのたーか ねをはるか にあーぎ
 なわもにしー げれるひめ かつこまー
 まか なびらのみ ちすは まさよ くらあすよ と
 かか たみにちーか いていそ ししみはげむ
 おま しなえののーわ こそげに とめうで たけれ
 あわ れとめうで たこーの まなびや

校歌

一 二荒の高嶺を 遙かに仰ぎ
 学びの道筋を まさしくあれと
 かたみに誓いて いそしみ励む
 教への庭こそ げに尊けれ
 あわれ尊 この学びや

二 庭面に茂れる 姫松小松
 変らぬ操は 千代万代と
 かたみに祝いて いそしみ励む
 学びの庭こそ げに芽出度けれ
 あわれ芽出度 この学びや



シーズンひかえ防火避難訓練(11月)



附属中学の生徒会総会も活発(6月)



恒例の生徒会総会が体育館で(6月)



趣向をこらしての校内展示会(11月)



鹿沼駅を清掃する学友会活動(10月)



お手並み競う和文タイプの検定(10月)



栃木県を紹介するとちぎ博へ(7月)



新装なったプールで夏を満喫(7月)



練習成果を発表の学内演奏会(6月)



父兄試食会に調理実習を公開(9月)



夜空彩るキャンプファイヤー(7月)

卷頭言

学園の発展を期して

校長 須賀 淳



『ひめまつ』の本号の表紙は山茶花さんぢかで飾られている。作者も表紙のことばで述べておられるように、山茶花は冬のきびしい寒さに耐えて咲くものである。それだけに、この花は美しさのなかにもりりしさがうかがわれる。さらに作者は、この山茶花をとおして私たちの学園の過去と将来を象徴したこのことである。

本学園の創立者、須賀栄子先生は、二十七歳の若さで本学園を創立し、昭和九年十月十四日に六十歳でお亡くなりになったが、昨年十月の御命日には全職員・生徒をはじめ同窓生、PTAの代表の方々などによって、先生の五十年祭がしめやかに行われ、これを一つの節目せきぶちとしてさらに本学園の飛躍・発展を図るべく一同気持ちを新たにしようとしたことである。

本学園は本年十一月で創立八十五周年の年輪を刻むことになるが、秋には短大に建設中の須賀友正記念ホールと新校舎が完成の運びとなる。記念ホールは、本学園の理事長として、また学長、校長として戦後学園の復興に尽力され、昭和五十七年九月に死去された須賀友正先生の遺徳を偲び、その大



会長 小田 弘子



副会長 川上 裕子



副会長 橋本 圭子



県総合運動公園で堂々の入場



会計 高橋 悦子



この日の花形は、日光和楽踊り



激闘/青春をぶつけて 騎馬戦



会計 山越 昌子



庶務 高野沢 ゆみ子



附属中学生によるマスゲーム



庶務 高瀬 綾子



校長先生から優勝カップ授与



議長団 平山 倫子

大運動会



10月、秋空、力走、ゴール 若さ発散



議長団 川田 俊男



議長団 木嶋 守



議長団 中岡 浩美

きな事績を後々まで伝えるために建設されるものである。このホールは五百名を収容する音楽ホールで、NHK技術研究所に音響設計を委嘱した日本最高の音響設備を備えたもので、学内はもとより県内外の音楽関係者から大きな期待を寄せられている。また、短大の新校舎建設は、現在開設の準備が進められている新学科の増設および現在の音楽科の定員増の計画にもとづくものである。

昭和四十二年に設置された宇都宮短大音楽科は、開設後わずかかの歳月にして全国的な名声をえるにいたり、学生は全国各地から集まってきている。そしてその内容は、名実ともに高く評価されているところである。これに加うるに、さらに各方面の要望にこたえて、このたび新たな学科を増設するものであるが、このための新校舎は、四階建の大、中、小の各講義室およびレッスン室など、宇都宮短大の将来の発展を見越した大きな構想のもとに計画されている。

一方、昭和五十八年四月に新設された附属中学校は、いよいよ四月に第三期生を迎え、待望の一年から三年までの全学年がそろふことになる。さる一月の第三期生の入学試験においては、開設後間もないにもかかわらず着々と教育の成果を上げていることが評価されて、応募者数は前年度にくらべ倍増を記録したのである。そのなかから選ばれた優秀な新生が四月には入学して、皆さんの仲間入りをする。

さらにまた、本学園の中核をなす高校では、二月初めに行われた入学試験の応募者が、創立以来最高の六千名を数えた。これまた、そのなかから選ばれた優秀な新生を迎えることになっている。

高校は現在、普通科、家政科、商業科のほかに、昭和三十九年に音楽科、四十五年に調理科、そして五十四年には男子普通科特進の各科を設けて生徒数二千名、進学に就職にすばらしい実績をあげていることは皆さん御存知のとおりである。

きたる三月六日には新しい卒業生を送り出すことになるが、本学園の名に恥じない「一人は一校を代表する」立派な卒業生として、それぞれの分野で十二分の活躍をすることを期待している。

このように本学園は、大学から中学まで文字どおりの総合学園に発展しているが、今日に至るまでには、幾多の苦難を乗り越えてきたことを忘れてはならない。そのうちのもっとも大きな試練は、昭和二十年七月十二日の宇都宮大空襲によって宇都宮の中心部にあった本校舎が全焼してしまったことである。学ぶべき校舎も、教材や教具もないという状態にあって、前校長夫妻を中心に全職員生徒はいうにおよばず卒業生、PTA会員が一丸となって学園の復興に努力した結果、現在の輝かしい復興発展を見ることができたのである。

私が座右の銘としている江戸時代の儒学者、熊澤蕃山の歌「憂きことのなほこの上に積れかし限りある身の力ためさん」の不退転の決意こそが、今日の学園の隆盛をもたらしたものと信じている。

今後長い歴史と伝統によって育まれた立派な校風のもとに、全学園一致して他の追随をゆるさない、特色ある学園の実現に邁進したいと思う。

【校長略歴】 宇都宮高校、東京大学卒業
昭和二十四年文部省勤務、文部大臣秘書官、
文化財課長、教科書課長、初等教育課長等歴任、
昭和四十三年須賀学園に戻る。
現在、須賀学園理事長、宇都宮短期大学長、
同附属中学・高等学校長、宇都宮大学教育学部
講師（教育財政学担当）、文部省大学設置審議
会委員、栃木県私学審議会委員、栃木県教科書
選定審議会会長等。

創立者 栄子先生 五十年祭行わる



本県女子教育の先駆者

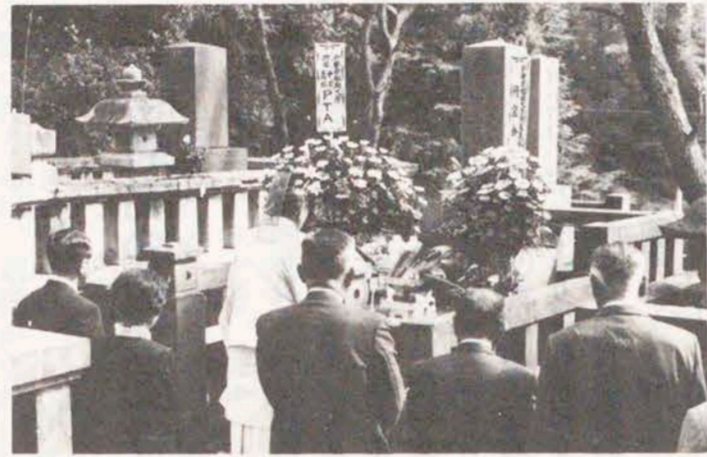
全学園で遺徳偲ぶ



50周年祭で創立者の思い出を語る校長先生

全校生で祭壇に参拝

本学園の創立者、須賀栄子先生の五十年祭が昭和五十九年十月十三日に行われました。
ご命日は十月十四日ですが、今回は当日が日曜日でしたので、その前日の十三日に行われたものです。
この日午前九時から祭壇の設けられた体育館に全職員生徒が集まり、まず須賀校長先生から創立者の五十年祭に関する訓話があり、栄子先生の思い出話などを交えながら、その女子教育に一生を捧げられた偉大な足跡が紹介されました。
つづいて栄子先生から直接教えを受けた本学園同窓会副会長で、大岡和裁専門学校の岡田校長先生から栄子先生にまつわるエピソードなどをお聞きした後、各クラスごとに祭壇に飾られた栄子先生のお写真にお参りして遺徳を偲びました。
さらにその後、同窓会、PTA、各科後援会の役員や職員生徒の代表が八幡山のご墓前に香をたむけ墓前祭を取り行いました。
次の手塚 武先生の献歌はその時のものです。



しめやかに行われた墓前祭

『献詠三首』

—— 須賀栄子先生の

五十年祭に当たりて ——

栃木県文化功労者
元本校 教諭

手塚 武

貫きし明治の魂ひとすじに婦女教育に打ちこまれたる

「礼法を正す」逸話のかずかずよ須賀魂は今に生きたり

二代目へ三代目へと相継ぎていよよ旺んなり須賀の学び舎

—— うち二首目一首を朗詠

昭和五十九年十月十三日、宇都宮市八幡山式場にて

偉大な生涯を顧みる ——女子教育に情熱注ぐ——

当時最高の教育受ける

明るく豊かな国家社会の基礎は、健全な家庭の建設にあります。その家庭の中心となってその責任を果たすことこそ、女性のもっとも尊い使命であり同時に、またその真価を発揮できる女性を育成することこそが重要であるという信念のもとに、女子教育に全生涯を捧げた、その人こそ須賀学園の創立者須賀栄子先生です。

にもかかわらず、栄子先生は二十七歳という若い女性の身をもって宇都宮に本学園を創設されました。以来、昭和九年にお亡くなりになるまで、実に三十四年の長い年月にわたって、若い女性達に真の使命を自覚させ、共和の精神に目覚め、そして実践に徹する堅実で気品高い婦人の育成に力を尽くされたことは、栃木県女子教育界の草分けとして、多くの人々の尊敬をあつめていた理由でもあるのです。

昭和二十年、戦争のために全焼して現在の場所に移る前の本学園は、宇都宮の昔のお城の跡、三の丸の満々と水をたたえたお堀のほとり、静かな住宅街の一角にありました。大谷石にかこまれた正門入口のあたりは、枝ぶりの美しい松の木が植えこまれ、四季を通じて変わることもない美しさを誇っていました。

より一層重要であると考えられたのです。このようにして先生は、人間形成の基礎となる学問と、ただちに実生活に直結する実技教育を実行されたのです。

女性としての身だしなみと技芸の習得、つまり今日の言葉でいえば生活指導に重点をおき、裁縫という実習を通して生徒たちに創造の喜びを味わわせ同時に強い忍耐力を養おうと考えられたのです。それは徹底した実行、実践の教育であり、生徒たちと生活を共にして、日常生活の中で生徒たちに先生みずから、こうあるべき姿の模範を示されたものだったのです。また、それは昔の塾の教育に近い理想的な場において、人間形成の教育を行ったものであるのです。

当時、学校の正門を入れてだれもがまず驚いたことは、石畳がきれいに水洗いされ、ちり一つとどめないその美しさに、地方からでてきた父兄のなかには、石畳があまりにもきれいなので、履物をぬいで手にもって入ってきたという話が今に伝わっています。これは、先生の方針に従って、清掃が

徹底して行われていたという一例です。この例が物語るように、先生はなにごとによらず、徹底的にやらなければ気がすまない人でもありました。

そして、あらゆる物事に根気よく忍耐強く取り組んでいかれたのです。生徒の教育上のごほういまでもなく、広く学問、研究のうえでも熱心に、また厳しく自分を戒める態度で臨まれたのです。なかでも先生は、幼い時から読書を好み、忙しい時でさえも時間を惜しんで、机の前にきちんと正座して読書をなさったのです。この先生の立派な態度から無言の教えをうけ、正しい読書の習慣が身につく、今なおそれを続けているという教え子も少なくありません。そして、夜、先生と一緒に生活している寮の生徒たちに、自分の生いたちや学用品にも不自由した時代のあったことなどを話して聞かされました。

こと、この姉は、明治天皇のお子さまである常宮、麗宮というお二方の宮さまの女官をなされていましたが、両親を失ったため、宮中からさがって栄子先生たち小さい妹たちの養育にあたることになったこと、そして、この姉が武士の家の育ちであり、そのうえ宮中に仕えておられたので、しつけの点はとくに厳しく、つらいことが多かったことなどを話してくださいました。

生徒たちは、こうして時にふれ折にふれて、栄子先生に身近かに接し、その人から多くを学びとってこの偉大な女子教育者の人格に知らず識らずのうちにひきつけられていったのです。

生涯独身のまま、全精魂をこめて、ひたすら女子教育ひとすじに情熱を注がれた先生の努力が着々と実を結び、学園も大きく発展していった昭和九年に教育に対する先生の立派な功労が国から認められ、先生おひとり天皇陛下にお目にかかるようにという名誉ある知らせをいただいたのです。先生はじめ、全学園をあげてその榮譽に感激し、先生はその白に備えて身も心も清めておられたのですが、お目にかかる

三年間の最高の思い出です。これも偏に先生、また先輩方のおかげだと思いません。先輩の残してくださった言葉は、私達のささえになりました。これからも、この言葉を後輩にうけつきたいと思えます。

そして、自分達の力で試合に勝つと言う本当の喜びを、後輩達にも知ってほしいと思います。それには、辛い練習もあると思いますが、どんなに辛くてもくじけずに、先生について行ってほしいと思います。

最後に未熟な私達を、ここまで成長させて下さいました藤橋先生には、心から感謝しております。本当にありがとうございました。

なお、今年の成績は次の通りです。
県下高校新人中部地区大会 三位
県下高校新人大会 ベスト8
関東大会県予選兼高校総体 ベスト8
インターハイ県予選 ベスト4
第39回国民体育大会県予選会 三位
(部長・鈴木 美智子)

男子バレーボール部

男子バレー部が復活して半年がたった。素人の集団だったが、監督の大谷武先生の厳しい特訓により、徐々に力をつけ、他校の注目をあびるまでに成長してきた。

昭和五十九年十一月二十三日、この日は男子バレー部にとっては、記念すべき日だった。中部地区新人バレーボール大会で、宇都宮北高と試合する日であった。初めての大会でもあったので、みんな緊張していた。しかし、いざ試合になると、みんな生き生きして自分たちの持っている力を十二分に発揮した。第一セットは十五対九で北高がとり、第二セットはデュースの末に二十一対十九で本校がとったが、最終セットは十五対九でおしくも北高にとられ一回戦で敗退した。敗れたのはくやしいけれど、一時間三十分の大熱戦ができたので悔いはなかった。そして十二月一日、宇都宮農業高校と練習試合をした。まだ初勝利をあげていなかったのに、ぜひ勝ちたかった。ハセツ

をやって五―三でとうとう初勝利をあげる事ができたのだ。時はかわって十二月十五日、県総合運動公園トレーニングセンターで、県の新人大会があった。

一回戦は矢板高校とだった。うわさでは、けっこう強いという話を聞いていたので、全力でぶつかっていかうとみんな熱えた。いざ試合が始まると二―〇のストレートで勝ち、公式戦で一勝をあげることができた。しかし、二回戦の対戦相手が佐野商業という強いチームとあたってしまった。みんな、敗けてもともとだから胸をかりるつもりでいこうとこの日話し合っていたら、新聞社の記者がきてインタビューをされ、多少とまどいながらも堂々と答えた。それまで懸命に練習してきたかいがあってと思った。そして十六日、佐野商業との試合では十五対一、十五対四で敗けてしまった。

今は全員、四月の大会にむけて練習している。こんどはぜひ、シード権をとって、男子バレー界に「宇都大附属高校」あり、と言われるようにしたい。
(部長・飯面 一昭)

学園ニュース

齋藤教頭先生に文部大臣賞



花束を受ける齋藤教頭先生と奥様(左端)

教育功労者として本校の教頭、齋藤太嘉男先生は昨春秋、晴れの文部大臣表彰を受けました。その祝賀会が十二月一日に宇都宮市のマスキンで行われましたが、本校教職員やPTA、各科後援会、同窓会の各役員多数が出席して大変盛況でした。

祝賀会では須賀校長先生から「本県の私学では初めてのことで、最高の栄誉です」と喜びの言葉があり、つづいて各役員からお祝いの言葉や記念品の贈呈がありました。

そのあと齋藤先生は「これも皆様のご支援ご協力があったからこそ、皆様がいただいたものです。今後も身体の続く限り頑張るつもりです」とお礼の言葉を述べました。

この祝賀会には、長い間齋藤先生をお助けしてこられた内助の功の大きい奥様も出席されました。

当時は、河原町の校舎を戦災でなくし、県立の校舎を間借りしての分散授業からやっと解放され、軍隊の兵舎であった現在の校舎に移ったばかりのときでした。

焼夷弾の火災を防ぐため天井板ははずされ、直接屋根裏がのぞける窓ガラスもない寒々とした教室での授業でしたが、自分達の学校で授業が出来たうれしさから楽しい授業ができたのです。今はなき友正校長先生を中心に、夢中になって再建を図ってこられました。

文字どおり、戦後の本校の歴史と共に歩んでこられた方です。
齋藤先生、どうぞ、いつまでもお元気で。

和久先生が入選

修学旅行のスナップ
コンテストで準特選

84日本カメラショーが、わが国の大手カメラメーカー十三社の主催により昨年六月十五日から二十日まで西武宇都宮百貨店で開かれましたが、それになんで行われた写真コンテストに、本校新聞部顧問の和久誠先生が応募した作品「おサルと少女」が見事準特選に入選しました。



準特選の「おサルと少女」

このコンテストには県内外から二百八十点の応募がありました。和久先生の作品は、去る五月の修学旅行の折に四国・小豆島の鈍子溪で写したスナップ。「モデルは担任のクラス生徒ですが、エサをせがむおサルさんが生徒のスカートを引き張っており、びっくりした生徒が思わず手をにぎりしめて振り返った。これは面白いと思って急いでカメラを向けたが、たった一枚しかシャッターを切るひまがなかったのに、その一枚が入選するとは全くラッキーでした。」と和久先生は言っておられました。

生徒会(高校)で アフリカ難民へ寄金

生徒会では、校内展示会で行ったバザアの益金をアフリカ難民のために下野新聞社に寄託し、下野新聞に次のように紹介されました。

宇都大附属高校(須賀淳校長)でこのほど、生徒会(大城則子会長)主催

のアフリカ難民救済のチャリティバザーを開き、二十二日、益金を下野新聞社に寄託した。

会場には生徒が家庭からコーヒーマット、せっけんなどの日用雑貨品や手づくりの人形、テーブルセンターなど約二千点を持ち寄った。

価格は市価の五割―七割引とあって、開場後わずか一時間で売り切れるほどの盛況ぶりだった。

この日の売り上げ七万四千五百六円は全額、アフリカ難民救済資金として下野新聞社に寄託された。

生徒会副会長の石嶋繁美さんは「難民は病気になることも、なかなか医薬品が支給されないと聞いていたので、その一部資金として役立ててほしい」と話していた。

附属中学生徒会でも寄金

(読売新聞 昭和五十九年十二月二日)

アフリカ難民救済金にと
三万千八百七十四円を寄託

宇都宮短大附中生徒会

宇都宮短大附属中学校生徒会会長・木原大亮君、同会議長・相田淳子さんは、一日、読売新聞宇都宮支社を訪れアフリカ難民救済金の一部にと三万一千八百七十四円を寄託した。「読売光と愛の事業団」を通じて現地へ贈る。木原君たちは飢餓にあえぐアフリカ難民の新聞切り抜きを教室に貼り、学友たちに愛の救済を呼びかけた。その結果、一、二年生七十三人が力を合わせ、風車やビー玉のアクセサリ、しおりなど紙細工約六百点を作って校内展示会で販売したという。

手芸作品展開かれる

去る十一月十七日から十九日の三日間、東武宇都宮百貨店四階特別催事場で、全国高等学校文化連盟手芸部主催の「第六回高校生手芸作品展」が開催されました。入場者も一般の人や生徒をあわせて約五百名を数え、大盛況でした。

本年度の展示会の特色は、内容にかたよりがなく、参加した全部の高校がそれぞれに知恵と工夫をこらしたバラエティに富む作品が多かったということです。出品作品は約三百点、小さなものから大きなものまで、みんな心のこもったあたたかみのある作品ばかりでした。須賀校長先生もご覧になられて、「毎年内容が向上しますね。」とおほめの言葉をくださいました。

本校ではリボンフラワーを中心に、機械編みのウエディングドレスや、フランス刺しゅうのエプロン、パッチワークに文化刺しゅうなどを出品しましたが、どれもこれも、この一年間の努力の結晶と言っても過言ではない物ばかりでした。私は、ブーケとフランス刺しゅうを製作したのですが、手芸と云うのは、どうしても手先のこまかい作業になりますので、毎晩ねむい目をこすりながら頑張りました。つらいこともあって、なげ出したくなることも何度もありましたが、何もかもが終わった今、「やってよかった。」という満足感でいっぱいです。展示されている私達の作品を見て、

他校のどの作品にも負けない一番美しくステキだったと思います。

また私達は、校長先生が手芸部会長をなさっている関係で、本部としてのお手伝いもすることが出来ました。会場設定や、表示の仕方にもいろいろ苦労があつて、有意義なことを勉強させていただきました。私は三年間、手芸クラブで活動してきましたが、今年が部長としてこの手芸展のために全力投球をしました。今年ほど充実してやりがいのあつた年はありません。指導して下さった先生方、私をもちあげてくれた仲間達、ついてきてくれた後輩の皆さんに深く感謝します。もう次の手芸展へのスタートはきられており、手芸部員も一体となって頑張っていますので、来年もぜひご期待下さい。(手芸部長・日下部 明美)

英国で公開レッスン

ユーフォニウムの藤井さん

ユーフォニウム、というわが国ではあまりなじみのない楽器をたずさえて

音楽科一年十六組の藤井利枝さんは、はるばるイギリスでの公開レッスンを臨みました。

昨年五月、この他流試合ともいえる緊張の連続だったレッスンの模様を藤井さんから聞いてみましょう。

私が、イギリスのエジンバラで行われる公開レッスンを受けるために、日本を出発したのは、去年の五月一日のことでした。

私は、小学校六年生の頃から、ユーフォニウムという楽器を始めました。まだ日本では、フルートやクラリネットほど普及していませんが、ずいぶん多くの人々が演奏するようになってきた楽器です。イギリスが本場で、百年以上も前から改良に改良を重ねられてきた楽器です。私はそのユーフォニウムと言う楽器の公開レッスンを受けるために、イギリスに向けて出発したわけです。

五月二日、日本を経ってから二十八時間後にやっと、ロンドンに到着しました。その日はそのままロンドンに泊り、その翌日、公開レッスンの行われるべく、

エジンバラという、イギリス北部に向かつて飛行機で出発、夕方到着しました。

空港を一步出るとそこは、霧が立ちこめ、小雨がしとしとと降っていました。空港の前に待っていたバスに乗り込み、そのまま、エジンバラの市街に向かいました。小さな森や林、牧場などをいくつか越え、小高い丘の上にある古い城が、霧の向こうにぼんやりと浮かび上がってきました。その古城を中心にエジンバラの街が広がっていると言ったことでした。その日は真つすぐホテルへ向かい、つかれていたので、ようか、練習が終わるとすぐに眠ってしまいました。

ちょうど私がエジンバラに着いた五月四日から出発する五月七日までは、エジンバラでは「ヨーロッパアンブラスバンドシップ」と言うコンテストが開催されていました。今回私が受けた公開レッスンもこのコンテストの一端なのですが、とにかくコンサートやセミナー、公開レッスン、コンテストなどが毎日、朝の九時から夜の十時まであ

り、私は、自分の練習の合間に鑑賞し、五月六日の公開レッスンの日までを過ごしました。

とうとう五月六日です。恐ろしい公開レッスンの日の朝が明けました。レッスンの開始時刻は午後の二時からだというのに、私は朝の五時に目が覚めてしまいました。静かにホテルの廊下に出ると、もう楽器の音がどこかの部屋から聞こえてきました。私は一瞬キックとしました。しかし私はそのまま自分の部屋に入ると、一人でただボーッと椅子に腰をかけているだけでした。朝食をすませ、私は練習を始めました。少しづつ少しづつ、レッスンの時間が近付いて来ます。その時間のたつのが恐ろしく早いのに、私はどうにも今ひとつ調子が出ませんでした。そして、正午を少しまわった頃、ホテルの部屋を出ました。

私は会場まで、歩いて行くことにしました。すぐに会場に着いてしまうのが、どうにも耐えられなかったからです。ゆっくりと辺りの風景に目をやりながら、思ったよりも遠く、長い道のりを歩きました。私はその時ふと、こ

そうして、会場に着いたのは、午後一時を少しまわった頃でした。まるで、どこかの教会のような建物で、古い木で造られた重いドアを私はゆっくりと開き、中に入って行きました。受付でチケットを渡すと、薄暗く狭い廊下を真つすぐに行き、つきあたりのドアを開いた瞬間、まぶしい光が私の目の中に飛びこんできました。しばらくそこに立ちすくんでいると、係の人に何か声をかけられ、やっと我に返りました。

まだ前の人のレッスンが終わっていませんでした。私は、近くの席にすわり、自分のレッスンの始まるのを待っていました。

やっと前の人のレッスンが終わり、十五分程の休憩がありました。そうしているとき、私と同伴してくださった先生が、今回レッスンしてくださるロンドンシンフォニーオーケストラのチューバ奏者、ジョン・フレッチャー氏と

一緒に、私の目の前に現われました。ジョン・フレッチャー氏は、私に優しくほほえみかけ、そのままステージの裏に行っていました。その数分後、二時になり、司会者がステージに上がり、レッスンの内容などの一部を説明し、次にジョン・フレッチャー氏のことを少し紹介しているようでした。そして拍手が迎えられ、ジョン・フレッチャー氏がステージに上がりました。そうしてしばらくは、ジョン・フレッチャー氏は、楽器などの説明をしていました。私の手は汗でビしょビしょになり、すわっている椅子まで動くのではないかと思う程、足が震えていました。

そして突然、私は自分の名前を呼ばれたことに気がきました。ジョン・フレッチャー氏は、ステージの端まで私を迎えに来てくれました。そして、ステージ中央に行くと、私はガク然としました。さっきまで三十人ぐらいたった客席に、なんと百人近くもの人がすわって、こちらを見つめているではありませんか。私の心臓は、はりさけんばかりでした。それでも、ユーフォニ

ウムを口にあてると、なぜか少し落ち着きました。音出しをするとすぐに曲をやるように言われ、私は入試のときに演奏した曲を吹きました。フレッチャー氏は何も言わず、目をつぶって聞いていました。同伴して下さった先生も、心配そうに私の方を見つめていました。そして演奏が終わると、その曲の細かい部分についてや、どのように曲想をつけたら良いかなど、細かくとても親切な注意と、もっと空気を扱うこと、自由に音楽を表現することなど、技術の面からも、音楽的な面からも、本当に丁寧にレッスンしてくれました。始まってしまおうとあっけなく、とても短いもので、ほんの数十分のレッスンでした。

このレッスンを受けたと言うことが、今の私、そして将来の私にどれだけ役に立つのか、そして、いつかまた、もっともっと充実したレッスンを、もう一度フレッチャー氏に受けることが出来るかは、この私自身にかかっているのは言うまでもなく、このような機会をあたえてくれた多くの先生方や両親に、私は今、深く感謝しています。

家政科後援会研修
「みちのく11人たび」
会津若松周辺の遺跡訪う

昨年の研修旅行はやはり福島県でしたが、一人でも多くの人に参加していただこうということで、これまでの泊りがけを日帰りに変更しました。しかし、やはり泊りがけの研修が、ゆっくりくつろいで会員相互の話し合いや親睦を深めて交流を図ることができるとの声が強いようでした。

そんなことから、平泉会長さんを中心に会員の方々が計画を練った結果、今回はまた一泊二日の予定で、福島県の会津若松方面に決まりました。土、日曜を利用して、八月十八日午前七時三十分、一行十一名（P側・平泉会長、渡辺副会長ら八名、T側・私と和久、永島両先生の三名）はマイクローバスで学校を出発。往路は東北自動車道の鹿沼インター・チェンジから一路みちのくの旅にスタートしました。コースは第一日目が、猪苗代湖―野

口英世記念館（福島県耶麻郡猪苗代町三城沢）―会津若松・飯盛山（昼食）―武家屋敷―鶴ヶ城、そして宿泊地は会津若松市の芦ノ牧温泉でした。この日も朝からカンカン照りで、福島市では気温三十五・九度を記録したほどでした。その前日は三十七度だったとか。



野口博士の生家は
見学者で大にぎわい

第一の見学地猪苗代湖は、二年生の恒例のキャンプでは必ず休憩地として立ち寄る、おなじみの所です。ここではしばしの涼を楽しみ、次の飯盛山から武家屋敷へ。飯盛山では往時を偲び昼食。

武家屋敷は、会津若松市にあります。これは戊辰戦役によってそのほとんどを焼失してしまった会津藩武家屋敷のうちから、追手門前に在った家老の邸宅を、二年あまりかけて復元したものだといわれます。

広い敷地に、建物面積約九百五十五平方メートル、部屋数四十に及ぶ居室、遺品を陳列した資料館、代官所を移築した福島県重要文化財指定の中畑陣屋、戊辰戦役当時、将兵の糧米をついた白河藩藩米精米所や、みちのく会津のルーツである古代の出土品二千余点が展示してあり、すばらしい総合博物館といえます。

次は白虎隊の歌で有名な鶴ヶ城でした。今年は築城六百年というので、会津武家文化展、会津歴史藩政展などのキャンペーン実施中で、登閣する人々があとを絶ちません。現在のものは、昭和四十年に復元されました。ここでは一同そろって記念撮影をいたしました。さていよいよ宿泊地芦ノ牧温泉です。ドドーンの大太鼓に迎えられて入った

スでした。

二日の最初は会津若松市内の酒造博物館で、今なお昔の酒蔵の名残りを止めるカワラ葺き、白カべづくりの建物にしばし一同足をとめたものである。今から約二百年前に酒造方役人をおき、灘から杜氏を招いて藩宮の酒造をはじめたのが藩蔵製酒の始まり。その藩蔵の一棟をこわす寸前に解体して、昭和五十三年九月に現在地に復元したものだそうす。

内部には酒造に関する器材器具をはじめ一般の民具など数千点の資料が展示されており、その歴史の古さを示しております。

栃木の地酒と飲みくらべてみようというところで、ここのお酒を求めた人も少くありませんでした。

次は鈴武という会津塗りの漆器工房へ回りました。ここでは完成まで三十三工程という、すべて手作業の文字どおり手作りの作品に目を見はったものでした。

さて帰路は旧会津街道といわれる田島を通って、三依、川治、鬼怒川、そして宇都宮ということで、三依地区か

らは私のクラスにきている生徒がおりますので、車中の皆さんの諒解を得て立ち寄ってみることにしました。

クルマを止めて地元の人に尋ねたところ、いままじ行った道路沿いの右側にあります。私がこちらから電話してあげましょう。と親切なはからいに感謝してしまいました。

すぐ生徒の家がわかり、訪ねてみると、ちょうど出校日をひかえて宇都宮へ行くところだというので、そのまま私たちのクルマに乗ってもらって、一緒に行くことになりました。

わざわざ立ち寄ってくださったと父兄にも大へん喜ばれ、かえってこちらが恐縮する始末でした。

昼食場所の五十里湖は、例年はないひでりでカラカラに干上がっています。このようにして予定より早く、午後三時すぎには無事学校に帰ることができました。

今回の研修旅行を振り返ってみますと、夜半までの教育についてのキタンのない意見がとび出した話し合いをはじめ、各地の歴史の跡を訪れ、しばし

会津グランドホテル「大川荘」は、大変かわった趣向がほどこされています。もともとこの温泉は、この地一帯が江戸時代の藩制を再現し、のぼりがはたさめき、どのホテル、旅館も時代を感じさせる建築ですが、「大川荘」は会津藩御本陣と銘うって、すべてがタイムカプセルで時代が逆転した感じます。まんまくに灯提の玄関を入ると、さむらい姿の従業員が腰元姿の女性とともに歓迎してくれました。旅館内で使用するお金は勿論大判小判に両替して使うことができます。

ここには川の流れを見おろす岩の中に復に野天風呂もあり、男の方々は大自然を満喫しておりました。

しかし、ここでは食事のあとの話し合いで、期せずして家庭教育など基本的な問題から、家庭と学校、さらに社会教育との連携など、極めて成果の大きな研修となり、三時間余も続きました。

第二日目。この日も快晴。この日は宿舎を午前九時出発。会津若松・酒造博物館―漆器工房―田島街道―五十里湖（昼食）―鬼怒川―学校というコー

ではありましたが古い時代に思いを馳せることができるなど、非常に有意義だったとの会員の方々の感想をお聞きして、こんな嬉しいことはありませんでした。
(戸室記)

会長は松岡氏に

PTA役員決まる

昭和五十九年度のPTA総会は六月二日開催され、新しい役員が次のように決まりました。

また、PTAの研修会が九月十五日、十六日の二日間行われ、羽黒山神社―鶴岡市(一泊)―寒河江―山形―赤湯―福島のコースを回ってまわりました。

(昭和五十九年度役員)

会長 松岡 祐祥
副会長 篠崎 キミ
渡辺 衛
金子 長次
増淵 隆
青木 基

会計 六川 彦次
会 柿沼 忠位
計 平泉 忠三
監 杉本 俊三
査 野本 靖三
野 賀 淳
須 賀 源三
高 山 喜三
岡 田 弘
川 出 茂雄
太 田 静江
三 矢 雄
中 野 林蔵

顧問 須賀 源三

相談 須賀 源三

幹事 太田 静江

附中の新役員も

附中PTA総会も四月二十八日開催され、次の役員が決まりました。

会長 荒木 猛男
副会長 石垣 八重子
石黒 彬男
委員 近沢 恒美
釜井 満郎
岩崎 逸子
伊藤 永峯
青木 智恵子

会計 増田 忠昭
監 興野 節子
査 並木 俊郎

学友会の奉仕活動

積極的な奉仕活動を

陽北支部

私達陽北支部は、M.L.室を本拠として、顧問の宇梶先生・信夫先生の御指導のもとで、一年生から三年生まで総勢六十四名のメンバーで構成されています。

一学期間に一度の集会で、今回の奉仕活動の内容を決めますが、「これだけの人数があるので活発な意見が出るのでは」と、内心期待していたけれど、結局、今年の奉仕活動も、毎年行われている公園清掃にとどまってしまう。それが裏目に出たのか、夏休みがある三回の出校日を利用して各学年ごとにわかれて、千波公園と今泉児童第一・第二公園の清掃を行いました。全員参加とまではいきませんでした。今度は、後輩のみなさんの番です。

前に述べたような事にならぬよう、確実に実行出来るものを決めて、各自一人一人が、もっと積極的に取り組んで良い結果が得られるようしっかり頑張ってください。今後の活躍を期待いたします。(支部長・石渡 多賀子)

意義ある活動を

陽西支部

我々陽西学友会は、人数が多すぎるために、協調がなく奉仕活動を決める時も、活発な意見があまりでませんでした。そのため、初めは募金ということになりました。その他には、陽西中の横にある護国神社の清掃をしました。夏休みの、出校日を利用して行いました。とっても積極的に参加してくれたのでよかったです。

最後に、支部長として十分役割りを果たせなかったことを、深く反省して

老人とのコミュニケーション

雀宮支部

私達雀宮支部は、去年の七十数名という、企業で言えば「大企業」から、今年の五十数名という「中小企業」的人数になり、教室も今までの被服二から普通教室に移されましたが、活動も人数の減少に比例し消費的になったのかというと、その様な事はなく、例年と同じように活発、多彩な活動を展開しております。

活動内容としては、雑布寄付、夏休み中には、雀宮駅前清掃、そして、昨年度より顧問になられた佐伯先生からの提案にともない始められた老人センターへの慰問と、多種多彩です。

「年寄りなんて自分達に関係ない。」と考えている人達は大勢いるでしょうが、決してそうではないと思います。

編集後記

「ひめまつ」第三十九号をお届けします。時がたつのは早いもので先号を手にしてからもう一年が過ぎました。本年度も様々な出来事がありました。この一年をふりかえってみて一番の行事はというと、「栄子先生五十年祭」でしょう。そこで五十年祭の特集を組みました。「ひめまつ」の創刊者で栃木県文化功労者の手塚武先生からは短歌を寄稿して頂き、また校長先生からは、長い歴史を有し益々発展の一途をたどる本学園の概要について、力強いお言葉を頂戴することができました。

わたし達編集委員は、顧問である和久誠先生、大谷武先生、山中晃子先生、更に前顧問の寺内恒夫先生から貴重なアドバイスを受け、例年より活発に原稿集めや校正、清書とがんばりました。その結果、原稿も沢山集まり全部をのせることができなかつたことをおわび申し上げます。

表紙絵を書いて下さった島田武幸画伯も本誌に深いご理解を示され、清楚な中にも力強い「山茶花」を描いて下さいました。常に感じていることですが、この表紙絵のお陰でわたし達の「ひめまつ」が薰り高い生徒会誌になっていることに感謝します。

最後に、充分とはいえない内容かもしれませんが、生徒会会員全員の思い出に残る「ひめまつ」となりますことを祈ってまいります。
(編集委員長・湯沢春美)

校史と校章

昨年秋50年祭を迎えられた創立者、須賀栄子先生は、女子に最も適切な技芸を教授し、その時代と境遇とに順応すべき実際の婦人の養成を教育の主旨とし、共和裁縫教習所から、共和裁縫女学校、宇都宮須賀女学校、宇都宮女子高等職業学校と校名を改め、発展されていきました。その後を須賀友正先生が受け継がれ、学制改革により、宇都宮須賀高等学校へ改正され、更に、宇都宮短期大学を設置し、高校も宇都宮短期大学附属高校へ改名致しました。しかし、昭和57年の9月1日にお亡くなりになられ、この後を受け継がれたのが、現校長先生でいらっしゃる須賀淳先生です。先生は、宇都宮短期大学附属中学校を設置し、様々な功績をあげ、現在に至っております。

我が校の生活目標である「一人は一校を代表する」という言葉の意味は、生徒一人一人が、それぞれに、本校生徒としての価値を知り、その価値を自分で見捨ててはいけないという事です。「一人」という人間の価値を見逃すことなく、それぞれの価値を自覚することこそ、人間の大きな喜びであり、幸福への素材であるとし、学校は、その価値のあり場を認識して、そのあり方を勉強する場であるというのが、須賀栄子先生のお考えで、私たちは現在、この言葉を胸に、本校生徒としての価値を認識し、生活しています。

本校が、現在に至るまでは、いくつかの校章がありました。現在使われている校章の由来は、須賀学園の「ス」をカタカナ文字で表わし、3つ合わせたものです。

「ひめまつ」第三十九号 (非売品)
昭和六十年三月一日印刷発行

宇都宮市睦町一番三五号
宇都宮短期大学附属高等学校

編集人 顧問 大谷 武

発行人 生徒会長 小田 弘子

印刷所 宇都宮市鶴田町一三五九の一

ヤマゼン印刷株式会社

印刷人 山本 征一郎

発行所 宇都宮短期大学附属高等学校生徒会
〒330 TEL 〇二八六(34) 四一六一〜三番